

# 「ハマのドン」の意地

下

ノンフィクション作家

三山 喬

「おい、眼鏡を持ってきてくれないかな。いつも新聞を読む眼鏡」

開港資料館や税関、神奈川県庁などレトロな欧風建築が集中するエリアにある藤木企業の本社ビル。初対面の挨拶をして以来、約四ヶ月ぶりの面会に対応してくれた「ハマのドン」藤木幸夫は、隣室に控える秘書に声をかけた。

## 藤木青年の戦後社会への眼差し

その手には私が数日前、送付した質問状が握られている。彼自身にまつわる過去二回の記事はすでに読んでもらったが、いよいよ締めくくりの本人インタビュー

準がおそらくふたつある。文献資料を読み込んで私がたどり着いたのは、そのような「仮説」だった。

ひとつは《荒廃した戦後・横浜の状況（とくに青少年の不良化問題など）に胸を痛め（略）自分なりに考えた民主主義の世の中における新秩序、すなわち「自分たちが今後目指すべき社会」のイメージ》であり、もうひとつは《略》ご尊父・幸太郎さんの人生を（息子として）調べ、学ぶなかで理解した「港の仕事を支えてきたある意味『親分・子分的』な血の通ったコミュニティ・人間関係の大切さ》ではなかったかということ。カジノ計画が象徴する「弱肉強食的な新自由主義」への反発は、とどのつまり、この2点に照らしての「受け入れ難さ」ではなかったかと。

質問状の文面への具体的言及こそなかったが、「ここまでよく調べてくれましたね」と彼が漏らしたねぎらいを、私は自説への肯定的反応として受け止めた。ここに書いた一点目の価値基準は、十代から二十代にかけ、レディアンツで年少者の指導にあたった時期

ーをするにあたり、改めて私の視座、具体的質問項目を五枚の紙にまとめたのだ。

藤木の持つその紙には、鉛筆の薄い字で何方所かに細かい書き込みがある。

「自分なりに思いをメモしたんだけど、寝つ転がって書いた文字だから、自分でも読めなくなっちゃって……」と眉をしかめ、苦笑する。

私にとつて最も重要なポイントが、前回までの記事の枠組みを、当の本人がどう受け止めるか、という点だ。地元保守政界・経済界を長年取り仕切り「ドン」と呼ばれる長老が、カジノ建設という国策に真つ向から反旗を翻した。少なからぬ人が「なぜ？」と訝った決断の背景には、横浜の歴史に由来する藤木の価値基

の思いを指す。たとえばガリ版刷りの機関紙『レディアンツ』創刊号（昭和二十四（一九四九）年十二月六日発行）には、「野球部監督 藤木幸夫」の名で「青年としての選手諸君に与う」というトップ記事が書かれている。

私はいつも、チームの会合に於いて諸君の前でチームおよび監督たる私自身に対する批判を求めているのだが、これに対し殆どの人が一言も発言することのないのは一体どうしたことか（略）諸君、われわれ自身のため、会のため、そしては祖国日本の将来のためにしっかり頑張ろうではないか。思っても見給え、古今東西を通じて積極性と和に乏しい集団に決まって現れたものは、あの恐ろしい独裁者以外の何物でもなかったということ……。

本稿ではすでにレディアンツの試みを、青年期の藤木による「民主主義実験」とする見立てを示したが、この記事の呼びかけはまさにそのための「檄文」とも呼べるものだった。